

令和6年度が終わりを迎え、来年度が新たなスタートを切ろうとしています。この節目は、期待と不安が入り混じるものです。来年度に向けての期待が膨らむ一方で、これから直面するであろう課題や不安も感じられるかもしれません。

第137回沖縄県医師会医学会総会では、多くの医師が一堂に会し、地域医療の未来について真摯に意見を交換し合う貴重な機会が提供されました。特に新たに企画された「沖縄県の未来の医療を考える“ちゃーあびー”の大激論会」では、年代も専門性も異なる医師同士で対話を通して互いの価値観を認識・再確認するというもので、新しい試みとして非常に興味深い取り組みです。このような試みは、沖縄県の医療の未来を切り拓くために欠かせない重要な一歩となるでしょう。

また、医療安全や質の向上についての講演もあり、日々の業務の中で「他人ごと」としてしまいがちな医療安全に対して、組織としてどう向き合うべきか、そしてどう高信頼性の組織を築いていくかというテーマが浮き彫りになりま

した。このような意識を持つことこそが、よりよい医療環境を作り出す鍵となるはずです。

沖縄県での医療の現状や課題に関しても多くの議論がなされており、特に小児医療に関しては、医師の不足や施設の逼迫が深刻な問題として取り上げられていました。地域全体で協力し合い、これらの問題に立ち向かう必要性を強く感じました。

琉球大学精神科に沖縄県出身の高江洲義和教授が赴任し、地元沖縄への貢献を誓う姿勢に感銘を受けました。きっと心強い味方になっていただけると確信しました。

日常医療の現場のみならず災害医療の現場などにも様々な課題が山積しており、時に疲れを感じることもあるかと思いますが、疲れや不安を感じる時にこそ、私たちの心を癒してくれるものがあると感じます。表紙写真年間グランプリ受賞作品「秋の大空高く うろこ雲」のように、時にぼんやりと沖縄の美しい景色を眺め、少し立ち止まることで、心に余裕を持ちながら次に進む力を得られるのではないのでしょうか。

広報委員 間仁田 守

